【39】 天災は忘れた頃に来る

これは、寺田寅彦が言った防災に関する最も有名な警句ですが、雪氷や防災の専門家の物理学者中谷宇吉郎（北海道大学教授）が、昭和 13 年 7 月の阪神大水害のとき、この警句を引用しつつ新聞に載せた小論があります。（昭和 13 年 7 月東京朝日新聞）
もう 80 年近く昔の文章ですが、内容に全く古さを感じさせないので、漢字を今流にした他は、原文のまま紹介します。

天　　災

中谷宇吉郎

天災は忘れた頃に来る。
これは寺田寅彦先生が、防災科学を説く時にいつも使われた言葉である。
今度の水害にしても、この感がある。
現在の人智では、天災を予防することも、正確に予知することも困難である。
只、現在の科学を最も有効に使えば、その被害を可成りの程度迄減少させることはできる。この数日の天気予報をきいていると、よく中るので感心している。
空梅雨の話のような御愛嬌もあったが、長期予報はまだ殆んど不可能なのだから、今度の水害に対しては気象台は充分にそのつとめを果たしている。
被害が大きかった理由の最大のものは、「忘れた頃」に起った点にある。
それについても気になるのは、もう大抵の人が忘れている大きい天災が、他にないかという点である。
縁起でもないことを云うやうだが、地震の災の心得なども、機会を見て、何度でも徹底させて置く必要がある。
地震教育が徹底してゐたら、その被害は十分の一位に切り下げられるものである。
即ち火災が防止できたら、関東大震災位の地震でもそれ程恐ろしいものではない。
くれぐれも心得べきことは、「天災は忘れた頃に来る」ことである。